

目の先にあるもの

昨年11月にオンラインで保育ナチュラリスト養成、幼児の環境教育に携わる村松亜希子さんの話を聞いた。

お話の中には2歳の娘と母が登場する。保育園からの帰り道の植え込みで娘がしゃがんでひたすらアリを眺めていた。ある日の帰り道、娘と一緒にしゃがんでみると、アリが自分の身体の数倍もあるチョウの羽を運んでいた。びっくりして娘の顔を見たら輝いていた。自分が子どもを見ていたのは子どもの背中だった。一緒に楽しめばよかった。と母親が語った。

子どもの周りに触れ合えるみどりがあるのは大切、子どもの様子を見て大人が自然の面白さを感じ、大人が環境教育されていくのだと感じたという話。

村松さんは、子どもたちにこそ多様な自然の中で育まれる、その機会が大事だということ。生き物との出会いでは、やさしく包むようにたなごころに乗せる姿が神々しく見える。そしてその生き物を返す瞬間が大切だと話していました。

私は、数十年前、娘を幼児教室に送っていく時に、娘を自転車の後ろに乗せて、坂道を登っていく。登り切ったところにあるツツジの植え込みで、後ろから「止まって」と指示が来る。娘は植え込みに入って一生懸命何かを探す仕草をしていた。娘を送っていくことしか考えていなかった私は、何を見ているのかなと関心を持つよりも、「早く行こうよ」とブツブツ言っていたのを思い出した。

自然や生き物好きの先生たちだったこともあって、生き物に対する目がおのずと育ってきたのかも知れません。同時に私個人も生き物に対して注ぐ目が育ってきたのかも知れず、自然観察指導員になるきっかけはこんなところにあったのかと振り返らずにはおれませんでした。

当時は自分の役割分担を果たすこと。子どもを送り届ける。子どもは教室で課題をこなす。そうした役割分担が大事だ。それが一番だと思っていたけれど。この瞬間が大事だということに改めて気づかせられたセミナーでした。

(松戸市 藤田 隆)



タネツケバナ

超お手軽な竹炭作り

昨年は2回にわたって超お手軽な竹炭作りを見学し、体験の為のお手伝いをしました。

きっかけは私が竹林整備で発生する竹残渣の処理に困っているのを知った知人が、こんな方法もありますよとイベントに誘ってくれたからです。竹を炭にするには炭窯や中古のドラム缶利用の炭化器を使うのは知っていましたが、設備が必要な事や焼き上げるのに徹夜での火の番など長時間かかるのが難点でした。

超お手軽方法では焼き始めてから数時間で仕上がるので、大助かりです。ただし、焼き上がった炭は細かく砕けているので燃料には向かず、畑に撒いて土壌改良剤とするのが主な用途です。

炭には無数の空隙があって、スポンジのように水を貯え、また土の粒子より粒が荒いので余分な雨水を速やかに地中へ浸透させます。保水と排水の相反する働きを同時に解決する優れたものです。

炭の空隙は土壌微生物の棲みかにもなり、環境問題に理解のある農家では化学肥料の多用により地力の衰えた農地を蘇えさせる切り札として需要があるので、20kg詰の袋が1000円ほどで取引されています。

肝心の竹炭作りですが、先ず地面に直径2メートルほどの浅い円形の窪みを作ります。掘る深さはスコップの刃の長さ程度ですから30cmで十分です。掘った土は周囲に土手のように積み上げて窪みを囲います。



次に窪みの中で焚火の要領で竹を燃やします。火勢が上がったら材料の竹を次々に投入し続けます。

炎が上がって激しく燃えるのは上面だけで、その下には赤い燐^{おき}が溜まりますが、そこは無酸素状態になるので灰になる事はありません。炎が収まったら散水して終わりです。

炭は炭素の塊で、元は大気中のCO²ですからこれを地中にすき込めば大気中の温室効果ガスを取り除いた事になります。

火を使わずに砕いたものを堆肥にすれば手っ取り早いと思う人がいるかも知れませんが、堆肥はいずれ微生物に分解されて水とCO²に戻ってしまいます。

温室効果ガスの排出抑制と大気中からの回収は人類の急務ですから、各国が取り組まなければなりません。化石燃料からバイオ燃料への置き換え、バイオ炭による炭素の固定も注目され、国のJクレジット制度があります。Jクレジット制度とは、CO²の排出量削減、吸収に貢献した分を認証し、その数値が取引可能となる制度です。

簡単にまとめれば炭にする事で里山や竹林整備

の残渣が処分できる。それが土壌改良剤として販売できる。更にCO²削減になる事です。

2月26日(日)に佐倉市と共催でこの件の専門家を招き、竹炭焼きの体験会と野外講演会を開催します。

予備日は3月5日(日)場所は佐倉市畔田の広場 時間などの詳細は申込者に個別案内します。

私扱いの参加枠が5名分ありますから希望者は saka.nabana@catv296.ne.jp まで申し込んで下さい

佐倉市 坂本 文雄 畔田谷津の生命を見守る会

2月の虫たち

2月も立春を過ぎると、陽だまりにはもう春の花やツクシが顔を出し始めていて、それらに虫たちが集まっている。ミツバチやハナアブたちが梅やツバキなどの花に。キタキチョウはオオイヌノフグリの花に。ナナホシテントウ、ツチイナゴ、ルリタテハ、キタテハなども日向ぼっこをしている。イタドリハムシ、ニホンアマガエルも顔を出す。コガタリハムシはいち早く土から出てきてギシギシの葉っぱで交尾。虫たちは陽ざしを受けてキラキラ輝やいている。虫も人も待ち遠しい春はもう少しの辛抱で訪れる。



山下美佐子 (東金市)

園生の森

昨年のこの時期、森の木道の手すりに色々なフユシャクガの卵が見られた。誰の卵か？孵化した幼虫はどうするのか？木道の脇は水路もある好きな葉っぱにたどり着くにはちょっと大変なのでは？幼虫は色々な植物を食べられないと生きていられないかもなど色々思っていたが、その後見に行けなかった。最初のクロスジフユエダシャクが現れた頃からまた森に通い始めた。木道の手すりはフユシャクだけでなく、他の蛾の幼虫・アリやハチ・クモ・チャタテ・テントウムシ・カメムシやアブラムシ・ヒラタアブ幼虫・鳥の落としものが見られる。寒くなると生きもの探しが難しくなるが、ここはいろんな虫が見られる。昨年と同じ時期にフユシャクだけでなく同じものが見られる。色々な生き物が命をつないでいるのだと思った。

松本 美千代(千葉市)



クロスジフユエダシャク産卵中

我が家には、トイプードルがいます。親ばか承知ですが、ぬいぐるみのようにフワフワで可愛いです♡散歩などで歩いていると、小さなお子さんから「かわいい♡」「わんわんだ♡」と声をかけられることがよくあります。いい子いい子する？と尋ねると、そのお子さんよりも横にいらしたお母さんのほうが目を輝かせることが多いのです。そして親子で一緒に、犬のフワフワの頭をやさしく撫でてくれます。お母さんの犬(生き物)への優しさ、接し方が、しぜんとお子さんに伝わっていくような微笑ましい光景です。

過去2回だけ、親子さんではなくて、保育園(幼稚園)の子どもたち約五人のグループの散歩中に出会いました。3~5歳ぐらいの異年齢のグループです。順番に撫でてもらい最後のお子さんがまったく同じ反応の言葉に驚きました。そのときの様子を漫画にしました。

ある日のこと↓



別の日、別の場所でも↓



犬も猫も親のお許しが得られず、飼うことはできず、サンタさんや短冊に子犬が欲しいとお願いしていた幼少時。動物園のふれあいコーナーに行く前は嬉しくて眠れなかった。はじめてモルモットを膝に乗せたとき、ずしりと重くて、心臓の鼓動が伝わり、細い爪が少し痛く、臭いけれど良い匂い。モルモットが怖がらないように膝に力を入れ、ドキドキしながらモルモットに触れました。ぬいぐるみと同じように可愛いけれど、ぬいぐるみとは全く別の感触。

最近、動物園のふれあいコーナーは縮小されつつありますね。

植物雑感『ヤブツバキ』: 藪椿・ツバキ。ツバキ科ツバキ属・Camellia japonica

2月を代表する花といえば、ツバキであると思います。照葉樹林の代表的な樹種で暖かい山地に生え、沿岸地に多い樹木です。野生種は赤い直径5cmほどの五弁の花をつけ、黄色い葯のついた多数の雄しべは基部で筒状に合着し、花芯には一杯の蜜を含み、春の初めの虫などいない時期に、メジロなどの鳥を集め花粉を運んでもらう鳥媒花です。野生の一重のツバキでなく、現在は園芸の種が多く、2,000種を超えるほど、多くの特徴のある種類があります。ツバキとサザンカの違いは、花弁が纏まって落ちるのがツバキで、花弁がバラバラに落ちるのがサザンカとありますが、ツバキにも花弁が一片毎にバラバラに落ちる「散り椿」というのがあります。京都の一条通り西大路東入りの地蔵院の庭にある散椿は花毎に落ちず、花弁が一片ずつ散っていく特徴があります。速水御舟 筆の「名樹散椿」(山種美術館所蔵・重要文化財)でも知られていますが、葉室鱗の小説「散り椿」に出てきたり、映画にもなっています。私は椿を覚えるべく、追っかけをした時に、黄色の花の椿の「金花茶(キンカチャ)」が見られ、感激しました。さらに、ツバキとは別品種になっているユキツバキの花が見たく、最初は皇居東御苑の県木のコーナーで新潟県の県木になっているユキツバキの花を見ました。自然状態でも見たく思っていたのですが、東葛のバス一泊研修会で福島県の只見へ出かけた時に浅草岳に登る途中で見られたのが印象に残っています。

「四季花ごよみ・椿の文化史」には、椿と日本人の関わりは古い。古代には油料や染料に使われる身近な植物だった。椿はまた、霊力を持つ神秘の木でもあった。日本書紀には景行天皇が椿で作った杖で土蜘蛛を退治した話が記されている。神木として畏れられたためであろうか、平安時代の勅撰集、物語、草紙類には椿の名が現れていない。後に、椿は悪鬼を追放する卯杖として、正月上の卯の日に天子に奉られた。装飾を施した卯杖は今でも正倉院に保管されている。鎌倉時代以降、椿はようやく花木として観賞されるようになる。室町・桃山時代には茶道、華道をたしなむ武士や僧侶に椿のひなびた風情が愛好された。椿の全盛は江戸時代である。二代将軍秀忠は江戸城内吹上花壇に椿の名花、珍花を集めた。(略)寛永年間には「百椿集」、「百椿図」などが出版され、いわゆる椿の黄金時代が訪れた。明治維新、幕府の崩壊とともに大名の庭園は荒廃し、椿への関心も薄れてしまう。戦後は海外での椿のブームが起こり、日本でも椿の園芸価値が見直された。と書かれてあります。ツバキは「記紀」や「万葉集」では花木として愛でられていたのに、平安時代約400年という長い年月の間、こんなに美しい椿の花があまり好まれなかったとは信じられません。

万葉集に「巨勢山(こせやま)の つらつらつばき つらつらに 見つつ偲はな 巨勢の春野を」

という有名な歌があります。これは坂門人足(さかとのひとり)が持統上皇の紀伊への行幸に随行した時に詠んだものです。巨勢山(現在の奈良県御所市古瀬)は標高295mの小さな山で大和から紀伊へ旅する時には必ず通る場所です。大宝元年(701年)の秋9月の歌とあり、椿の花がつらつらと連なって咲いているのでなく、春に椿の花の咲いてる情景を思い、葉のつやつやしてる様子から「つらつら」を繰り返す表現で詠んだものです。私はこの歌が好きで、花の盛りに詠んだ歌とばかり思っていたのですが、今回ツバキを調べて分かりました。



しかし、歌としては素晴らしい表現で、情感がツバキらしく伝わってきます。 小島紀彦(我孫子市)